

新・瘠我慢の説

經濟學者
渡辺利夫

第三十三回 海外雄飛の物語

のちに拓殖大学となる台湾協会学校の設立趣意書の第一条は、こうである。

「本校ハ台湾及ビ南清地方ニ於テ公私ノ業務ニ従事スルニ必要ナル學術ヲ授クルヲ以テ目的トス」

修業年限は三年。授業科目をみると、台湾語、支那官語、英語、簿記、数学、統計学、法学通論、刑法、民法、商法、国際法、行政学、経済学、財政学、農政学、商工経済学、商業地理、植民論、亞細亞史とある。語学を中心とし、その他、海外で働くための実学が網羅されている。

明治三十六年（一九〇三）七月、第一回卒業式

が挙行された。卒業生は四十五名、うち二十一名が台湾総督府ならびに関連部に従事することになった。台湾協会学校の目的は、先にも示したとおりきわめて明瞭なものであった。学生たちは在学証明と称する、いわば誓約書の提出を義務づけられた。そこには「卒業ノ上ハ永ク台湾及ビ南清地方ニ於テ業務ニ従事可仕、仍テ証書如此候也」とある。台湾協会学校が、海外領土開発のための人材養成の場として、日本唯一のユニークな存在であったことはすでに述べたが、「海外雄飛」を誓約書をもって義務づけたという点からみても、その設立目

的が大変に明確なものであったことがわからう。

第一期から第四期までの卒業生二百十五名のうち、台湾総督府に就業したのは二十六名であった。

総督府の全部局、特に地方部局に卒業生が就いた。台湾の統治がまだ緒に上らなかつた頃のことである。

台湾の主要都市部門でインフラ整備、治安対策などがようやく着手されたばかりであり、地方には総督府の統治の手がまだ及んでおらず、治安状態にも不穏なものがあつた時期であつた。

「土匪」と呼ばれるアウトロー集団が出没し、日本統治に反感を抱く人々や社会的不満層がこれに加わり、地方の役場や警察官派出所などがしばしば襲撃された。そのうえ、熱帯・亜熱帯の台湾の衛生状態は劣悪、マラリア、コレラ、ペスト、チフスなどが時に猛威を振るつていた。アヘン吸引の習慣も蔓延していた。

当時の台湾は、市街地を一步出ると何が起るかかわからないような状態であつた。そういう地方に向けて、日本の統治のネットワークを広げようと

総督府の地方局が設置されたのだが、これら地方局の第一線のスタッフとして台湾協会学校の卒業生の多くが赴任したのである。

大正十一年（一九二二）、学校名は東洋協会大学となつた。大学の目的も、「進取果敢ノ氣質ニ充チ、且ツ増殖ノ率世界ニ類罕ナル我民族ハ此ノ極小ナル天地ヨリ出テ、海外ニ發展セザル可ラザル宿命ヲ有ス」とうたいあげられた。台湾総督であつた初代学長の桂太郎、朝鮮の東洋拓殖株式会社の創立にもかかわつた第二代学長の小松原英太郎、台湾総督府民政長官・満鉄初代総裁を務めた第三代学長の後藤新平、この三代の学長の変遷が、拓殖大学の伸長のありようを象徴している。

大正期の校風をよく顕しているものが校歌である。いまなお拓殖大学において歌われている校歌の第三番はこうである。膏雨とは慈雨、礪确とは荒地の意味である。

人種の色と地の境

我が立つ前に差別なし

膏雨ひとしく湿さば

磯确やがて花咲かむ

使命は崇し青年の

力あふるる海の外

大正八年の海外在住者は六百六十三名、国内が四百二十四名、海外在住者のほうが国内にとどまっていた者よりはるかに多い。大正期のいずれの時点でみても、同様であった。このような教育機関は、拓殖大学以外のどこにもない。大正十一年の海外在住者は、朝鮮二百八十二名、台湾七十六名、南洋十八名、シベリア四名であった。海外在住者がどんな組織に属していたかを、国別にかかわらず列記してみよう。十三名以下は除外する。

朝鮮金融組合

南満州鉄道

朝鮮総督府、関連諸官庁

台湾総督府、関連諸官庁

三井物産会社

朝鮮銀行

百二名

七十五名

五十名

四十五名

四十一名

三十七名

台湾銀行

東亜煙草会社

朝鮮拓殖銀行

日本郵便会社

東洋拓殖会社

在満州、関連諸官庁

横浜正金銀行

二十六名

二十五名

二十四名

二十二名

二十一名

十七名

十六名

大正期において、卒業生たちが赴任先国で、どんな感懐を抱いてその国を眺めていたのか。大正三年（一九一四）十月の学友会『会報』に寄せた堀新平（第十二期生）の初々しい文章がある。台湾総督府の地方部局の一つ、台南庁に赴任するために台湾との往復船の笠戸丸に神戸から乗り、五日間をかけて台湾の基隆港に到着、上陸して目的地に向かう列車に乗り、初めて台湾の地を踏んだ時の情景描写である。

これから自分が赴任する地がどんなところなのだろうかという不安と、しかし大学で得た語学や地域事情の知識をもって、なんとか頑張ろうとい

う気概が伝わってくる。

「六千幾頓の我が笠戸丸が基隆港に横付けになつたのは六日の午後五時半でした。弁髪を頭に巻き裸体同様の台湾苦力は行李の陸揚げに先を争ふて船にやつて来ました。上陸して停車場に赴き八時発の打狗行の列車に乗り込みました。客は内地人と本島人と殆ど相半はする有様でしたが、私は大和民族の偉大なる発展力に驚きました。又官吏の物々しい帯剣で渡台する人の目を惹きます。汽車の進行するのに随ひ沿道には七月初旬なるに柿は熟して利鎌を待つあり既に刈取られて水牛の田を耕するあり、内地と全く式の異なつた台湾家屋やら種々の草木まで私共には珍しい世界が展開するのです。

私の坐席の前に台湾婦人が一人の団仔をつれて腰をかけて居りましたが、私の食ふパンを見てその団仔が母にねだりました。すると母親は二銭銅貨一枚を出して私に売つて呉れと申しました。此の時初めて学校で柯先生から学んだ台湾語を実地に

応用しますと、案外にも先方に通ずるので占めたりと、知れる限りのことを話しました」

もう一つは、排日運動の燃え盛る上海での観察を、体験した者でなければ描き得ない緊迫の筆致で描いた文章がある。卒業生原田茂のものである。

「支那学生等は路上にて参々伍々散在して檄文を配り、手には切勿暴動(暴動はしてならない)の四文字を墨痕鮮かに記したる白旗を翻し、無知の下級民をして日本排斥に傾注せしめ居り。教師引率の下に隊伍堂々の示威運動をなし、戸別に熱血的過激文字を連ねたる白旗を立て門戸に愛国休業抵制日貨、或は五月九日国恥記念等不都合なる連を貼り、或は画に眠れる獅子が今日を覚して日本の国土に爪を立てんとするところを画くなど実に振つて居り候」

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、成長のアジア 停滞のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア 太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一二年、正論大賞。